

耕縁白豊

NO.67 西畑亮一

さあ・・・また新しい1年、2011年が始まりました。そして時間は日日新しい、その分身体は古くなる。でも、それは人間の熟した感性の発揮しど

ころでもあるでしょう。人間の感覚だと物理的な時間は連続しているのですが、先人の知恵に倣い、ここで一区切りして、これまでの気分や惰性を一新することも必要ではないかと思ひます。時間(年月日)は自然現象に由来するので、あるがままの自然の中でしか生きれない生物としての人間は従うしかありません。が、気持ちだけは切り替えるため、これまでの流れを「ちょっと待ったあ〜」と一旦停止し、新しい酒は新しい皮袋に入れるが如く、1月はもう1つ別の観点から縁の耕しを試みましょう。

干支は今年、卯ですね。戦前、旧日本陸軍の化学兵器(毒ガス)製造工場があった広島県の大久野島では、兎が40年ほどで約300羽まで繁殖し今や「兎の楽園」となっているそうです。「楽園」とは羨ましい。焦土と化した国土も今年で66年を迎えるわけですから、兎たちと同様に、いやそれ以上に私たちの社会も平凡な庶民がより豊かに暮らせる地域社会になっていてもいいはずですよ。菅直人内閣総理大臣は「最小不幸社会」なるものを掲げていますが、1945年前後から続く未解決な問題が山積みなのであって、私は精神だけでも66年前に戻って、ネジを巻き直さないと「最初から不幸社会」のまま続いていくように思えます。終われば水に流す心的傾向を見直し、現在と未来のため常に過去に学ぶ姿勢が問われるんじゃないでしょうか。



実は昨年、終わってから言うのも何ですが2008年6月の国会で決められた「国民読書年」でした。みなさんは普段、本とどう付き合っておられるでしょうか。これまではあまり付き合いのない方も、できればこれを機会に本に少し関心を持ってほしいです。出版不況打開策とは関係ありません、念のため。2010年を「国民読書年」と決めたのは国民の読書熱を後押しするのが狙いらしいのですが、一部の本好きの自由な盛り上がりタダ乗りするんじゃないかと、他のやるべきことに貴重なお金や時間を使ってほしいものです。議員たちが政策立案に必要な多くの勉強のため、ほとんど私費で本や資料等を買って読んで熱心に読み込んでいたなら、わざわざ国会で「国民読書年」など決めるまでもなかったんじゃないでしょうか。「国民読書年」とは、空振りを予想しての自らに言い聞かせる「すべて官公職者は読まなあかんねん」の別名ではないかと思ひます。彼らや彼女たちは、手軽に入手できる本だけでなく判断が難しい国民の声も目で聴き、耳で読まねばならないでしょう。



私たちにとって基本的に読書は、ある種の人付き合いにも似ていて、そんな国会での他人事な決定とはまったく無関係に極めて私的に進められます。親しい間での読み聞かせ、有志の輪読会、他者のための音読等の複数人での読書にも魅力的なところがあります。1冊の難しい本を一生を賭けて取り組んだり、多くのさまざまな分野の本を短時間で多読する場合もあるでしょう。同じ本であっても読むタイミングによって、目に止まる所は違ったりします。本との付き合い方は、人それぞれ十人十色です。本は著者との対話でもあり、手触りある本という物やその著者を媒介にした自分自身との対話でもあります。読まねばならないとか、正

しく理解しないといけないうんじゃないかと、人それぞれの付き合い方があって良いと思うのです。綺麗な装丁がお気に入り、ページを開かずただ外観を眺めているいろいろ想像するだけでもその効用大である場合もあるでしょう。それは、「積読(つんどく:買うだけ買って読まずに積上げておく)」ならぬ「持つ読(もつとく:手元に持っておく)」ではないでしょうか。

私は、新しく購入した本を含め「積読(つんどく)」から格上げになった再会を待ち望むであろう何冊もの「持つ読(もつとく)」をそれぞれ持っているのですが、その中から毎回偶然に選ばれた1冊が外出の際には鞆の中で私と共に移動しています。身近で付加価値の高い、まるで共に歩む友人のような本からの縁を繋ぐため、みなさんもそんな「持つ読(もつとく)」スタイルを「国民読書年」が終わった今年、見つけてみませんか。